

第1回検討会の振り返り及び対応方針について

1. 前回の振り返り

検討会の目的とスコープ

○ 検討会の目的について

- ✓ 本質的には今できていないけれど、実現したいことは何なのか、まずこういった課題や価値創造に企業からの資金流入が必要なのか、をきちんと議論できると良い。【工藤座長】
- ✓ インパクトの可視化がなくても、実装ができるテーマはある。今回の検討会のゴールとして、エンパワーを目的にするのか、インパクト評価によるアセットの増大まで行うのかは議論の余地があるだろう。【安部参考人】

○ 促進させたい取組について

- ✓ 取組の大小も含めて、取組をしやすい地域、しづらい地域とあると理解している。どういう取組を掘り起こせるとよいのか。【秋元委員】
- ✓ 経済的合理性がききにくいところへお金を流す仕組みにしていけないといけないのでは。【竹下委員】

企業への訴求方法

- ✓ 都市の企業がなぜ農村にお金を拠出するのか、といったこと、その説明がうまくできると良い。【大塚委員】
- ✓ どうしたら企業がお金を出すのか、例えば、企業のサプライチェーンやバリューチェーンとして、今のままだと企業にリスクがあるという言い方や、農村の維持は観光産業の維持にもつながるため、維持していくことが必要という言い方もあるかもしれない。【工藤座長】
- ✓ 企業版ふるさと納税の場合、7～8割は地域にこだわりがなく、テーマを自社のマテリアリティと紐づけたいとして入っている。【井上参考人】

1. 前回の振り返り

インパクト設定／ロジックモデル作成方針

- ✓ インパクトを定量的に表すこととした場合、農村に関わる人のwell-being向上が取り組みやすく、企業も対象にしやすいのではないか。【大塚委員】
- ✓ 多面的機能が企業や都市の人に伝わっていないということが問題ではないかと思っており、本検討会ではそれを可視化して数値化することが必要。【高橋参考人】
- ✓ ネイチャーポジティブの観点は重要であり、農業という観点で取り組むと拾えない棚田を守るために頑張っている人たちなどを拾うことができる。お金にならなくても、よい取組をやっている地域を拾い上げる仕組みも必要。【秋元委員】
- ✓ 企業が直面するサステナビリティ開示においても気候変動、自然・生物多様性、そして人的資本が重要なテーマであり、well-beingはそれらとも関連性の高いテーマであると思う。【増岡委員】
- ✓ シナジーやトレードオフを含めインパクト同士の相互関連性を見逃してはならず、それらをつなげることによってこれまで企業に訴求できる価値やインパクトもあるのではないか。【増岡委員】
- ✓ 指標の置き方として、1つの指標で複数のインパクトを見るのか、1つのインパクトで複数の指標を見るかの整理は必要。【増岡委員】

ガイドラインの位置づけ

- ✓ ガイドラインの位置づけとして、インパクトを可視化することで誰のどういう行動を促すものにするのか、ということの解像度を高めていくことが必要。【工藤座長】
- ✓ 企業のサステナビリティ担当と現場の事業者が共通言語として語れるようなものができるとう良い。【増岡委員】
- ✓ 官民でプロジェクトに取り組む上で、行政の当たり前と民間企業の当たり前は異なり、互いの言語を翻訳することが大切。【平澤委員】

2. 対応方針案

検討会の目的とスコープ

- ✓ 今年度は農山漁村におけるインパクトの可視化までを行い、次年度以降に具体的な農山漁村の課題解決の案件形成につなげていく。
- ✓ 本検討会の位置づけ及び全体像の詳細は、資料2にてご説明。

企業への訴求方法

- ✓ 訴求対象となる企業に対し、農山漁村における課題を自分事として捉えられるよう、ガイドラインにおいてその意義を整理する。

インパクト設定／ロジックモデル作成方針

- ✓ 気候変動についても企業にとって関心の高い事項であることから、追加する。
- ✓ 第1回のご意見を踏まえたインパクト設定方針は、資料3にてご説明。
- ✓ インパクト同士の相互関連性及び各種指標との対応関係については、引き続き検討。

ガイドラインの位置づけ

- ✓ 企業側の目線と地域側の目線を合わせ、共通言語となるような内容とする。
- ✓ ガイドラインの作成方針については、資料3にてご説明。